日本における宗教と自殺の問題

稲岡順雄

日本における自殺と宗教の問題

戦後の著しい社會問題の一つに青少年の犯罪と自殺がある。ことに日々の新聞紙上に自殺記事の載らない日はない。とくに青年層の自殺が激増したために日本の自殺率はいまや世界第一にのしあがつて來たという悲しむべき事實を最近の新聞は報じている。かくのごとき青年層の自殺の多くは彼等の道德心の低下と氣魄の減衰に原因すると一部の人々は考えているが、これのみにすべてを負わす事は餘りに酷である。なんとなれば、自殺する青年者の多くは一般青年に較べてすぐれた才能の持主であることを統計は示している。

また、最近の自殺現象で最も悲慘なのは親子心中である。ことにいたいけな幼少年が、兩親あるいは父や母の犠牲となつてその生命をたたれる事實に目を蔽うことは出來ない。

從つて我々は、この自殺という最も悲しむべき現實を正視して、そのよつてきたる原因をつきとめなければならない。しかもその動因には種々のものが數えられるであろうが、我々はこの小論において人間の生命を尊重する宗教的觀點から主として日本の自殺現象を考察するであろう。

第一章　自殺とは何ぞや

自殺とは通常文字通り、「自ら自分の生命をたつこと」あるいは「自ら身を殺して死ぬこと」などと説明されている。また常識的には自殺とは「ひとりの人間がじぶんの手でじぶんの生命を絶つことである」と考えられるが、果してこれだけの定義で自殺の本質を理解することができるであろうか。

まづ第一に問題になるのは、自殺は果して人間のみに限られた現象であるかどうかと云うことである。人間はしばしば神と動物との中間者であるといわれているが、これについてわれわれは有名な小説家芥川龍之介の小説「侏儒の言葉」に出ている「あらゆる神の屬性中最も神のために同情するのは神には自殺の出來ないことである」と云う文句を想いおこす。これは恐らくプリニウス（Plinius B. C. 23-79）の「神でさえ決して萬能であるわけではない。と云うのは神はみずから欲しても自殺することはできないのだから」と云う言葉からの引用であろうが、全能であるべき神に自殺と云う不可能事があるのは矛盾かも知れないが、しかしその自殺の出來ないところが卽ち神を人間から區別する特性であるとも云える。

また動物の自殺についてしばしば報告されている。例えば、アリストテレスによつて引用されて有名になつた馬の話がある。それによると子馬と交尾させようとしたとき、その母馬はいくたびも拒んだ後、意識的に高い崖から飛降りて自殺したと云うのであり、またそのほか主人の死に遇つた犬が食を斷つて死んだと云うような例が數多く報告されているが、死を豫知することも、また自ら死を招く手段を思いつく知能をもたない動物にとつては一種の本能の結果による强烈な反射作用の現象であると考えるべきであり、結局、自殺は人間にのみ與えられた特權であり、それ故に人間はまさしく「自殺の出來る動物である」と呼ぶことが出來る。

かくして結局自殺とは、「人間が自ら自分の生命を絶つこと」と云うことになる。しかしこれのみではまだ自殺の學的概念とするには不十分であると云わなければならない。なんとなれば、もしこれを文字通り解すれば誤つて毒をのんだり、誤つて高所から墜死するような突發的事故も人間の自殺行爲と受取られるかも知れない。しかし、かかる突發的な誤失による自殺が眞の自殺でないことは云うまでもない。從つて、われわれは更に眞の自殺を明確に檢討する必要がある。

この點について從來から自殺の本質について考究し、最も注目すべき成果をあげているのはフランスのデュルケム等 (E. Durkheim 1858–1917) を中心とした社會學派の自殺論である。ことにデュルケムは、彼の著「自殺論」(Lesuicide 1897) のなかで自殺を定義して、「死者自身によつてなされた積極的消極的行爲から直接間接におこる死の場合、而して死者がこの結果を生ずべきことを知つていた死の場合をすべて自殺と呼ぶ」としている。例えば、毒物や刃物などを用いて生命を絶つ積極的行爲や絶食などによる消極的行爲、また自ら致命的打擊を加えたときにおこる死などがこの結果を生ずべきことを知つていた死の場合、卽ちここでは死が意識的であり死者がそのなすところを知つていることがとくに强調されている。從つて、この限定によつて過失による致命的な偶然自殺や無意識狀態にある幻覺者の狂亂自殺などは眞の自殺から除外することが出來る。

しかし彼以後の多くの學者から高く評價されているデュルケムのこの定義も、生と死の間の選擇を許されない强制によるいわゆる强制自殺をも眞の自殺行爲のなかに含むようになる。しかし例えば、アテナイの獄舍のなかで信念のために嚴かな一生を終つたソクラテスは、生と死の選擇が許されなかつたが故に何人も彼の死を自殺とは考えないであろうし、また原始社會において、役立たない老人を强制的に自殺せしめたり、また原始社會やまた其の他多くの民族にみられた殉死のごとき制度的自殺もまた眞の自殺と考えることは出來ない。なんとなれば、彼等はこの結果が生

ずべきことは充分知つていたが、しかし生きることを選ぶことは不可能であり、しかも自ら死を與えることを選ぶのではないからである。

尙またデュルケムの定義は免れることが出來ると信じない雄々しく聖なる義務をみたすための倫理自殺、例えば信仰のために死ぬ殉教者や子のために身を犧牲にする母や祖國を救うために死の危險を犯す勇敢な兵士をも自殺者のなかに列せしめている。この場合はいづれも正氣で決定され選擇の對象でもあるが、ここでは死そのものを目的として望まれたのでなく、眞の目的は滅死奉公心、犧牲心にあり、死はそのための手段にすぎない。しかし眞の自殺においては死が死として望まれ、全く違つた一條件、一方法として望まれたものでないことが要請されねばならない。

また更にデュルケムの定義は、例えば、軍人が野蠻な敵に捕えられ、生きながらえる可能性は全くなく、ただはずかしめを免れるためただ死の終局が少しでも殘酷でないように、靜かな氣品ある死に方を選ぶ可能性をもつのみであるいわゆる安樂往生自殺をも除外していない。しかしこれも眞の自殺とは決して云えない。

以上のごとくデュルケムの定義を手がかりとして、常識的に自殺らしく考えられる種々の例を檢討して、結局自殺とは嚴肅な意味において、死者が生き度いと思えば生きることが出來る正氣な者の死であり、しかも犧牲や强制でない死であり、論理的義務によらない死であることが必要にして缺くべからざる條件とならなければならない。このことを更に云いかえれば、「自殺とは、あらゆる倫理的義務や强制や犧牲の外において生きていたいとおもえば生きられるのに、死を選ぶ正氣な人が自己に死を與える行爲である」と云うことが出來るであろう。

第二章　自殺の心理

ここではわれわれは、自殺者が自殺にいたる心の動き、卽ち自殺の心理を考察するが、そのためにはまづ自殺をそ

の傾向、その動機、その動機、その論理、その實行に分けて考えてみる。

まづ第一の自殺の傾向は、「死にたい」とか、「自殺したほうがましだ」とかいうごときまだぼんやりした自殺への傾向であり、いわば自殺行動の素地となるものである。この自殺傾向はさらに生理的、心理的に分類して考えられるであろう。

このうち自殺の生理的傾向とは生得的體質、または後天的にできた特異な體質をもつている人が、ある機會に自殺を企てたり、自殺をとげたりすると考えられる場合である。卽ち遺傳的な要因を假定せんとするものである。しかしさきにあげたデュルケムは自殺の遺傳的生理的な原因について、多くの反證をあげてこれに反對している。彼のあげている統計的數字は年代的にも古く、また必ずしも正確であるとは云えないが、しかし今日においても多くの示唆を與えている。例えば、精神病者の多いユダヤ教徒において自殺は少く、また自殺は年齡的には青少年と老年期に最も多いにも拘らず精神異常者は壯年期に多いし、また精神異常の少い國が却つて自殺者が多いなど精神異常は必ずしも自殺を結果するとは限らず、また精神病は殆んど醫學的には遺傳によるために結局自殺の遺傳覺は否定せざるを得ない立場をとつている。デュルケムのかかる見解は、今日において實證的に證明されている。

つぎに自殺の心理的傾向としては、まづはつきり自殺しようとする決心でなく、つねに死を思い人生のはかなさを考えたりする厭世觀や多少とも自己の縮小感や劣等感を伴う悲觀主義と、積極的に生きてゆくための生命力が次第に枯渴してゆくと感じる無力感や。すべてを運命としてあきらめようとする運命主義や積極的な死へのあこがれ、あるいは來世への幸福を願うあまり自殺しようとする原始的な自殺傾向などがあげられる。

また自殺の環境的傾向には氣候風土などの自然環境のみでなく、年齡、性、職業、社會狀勢、社會構造などの社會的環境とがある。

このうち自然環境が自殺に及ぼす影響は、例えば、自殺と季節の關係とか、自殺は一日のうちで何時頃に多いか、また自殺はどの週日に多いかなどと、また寒帶地方か熱帶か、温帶などの風土的環境とか種々のものがあげられるが、現在では統計的にも正確なる結論は與えられていない。

さらに自殺と社會環境についてはデュルケムが早くから取上げた立場であり、例えば、人間が生れ、育ち、しかも現在生存している社會條件によつて自殺の傾向が變化するのを意味するのである。これについても具體的には自殺と年齢、性、配偶關係、地域差あるいは社會狀勢、社會構造、宗教などに分けて考えることが出來る。このうち社會構造と宗教については本稿の主題として後述するであろう。

まづ自殺と年齢については一五歳以下の幼少年の自殺は極めて少く、とくに日本以外の諸外國では四〇歳以上の壯年期から次第に上昇するのに對して日本では、青年期に急上昇し壯年期に低下し、更に五〇歳以上の老年期から次第に上昇傾向をたどることが統計によつて明らかにされている。また男女の自殺率はインドを除いて、何れの國においても女子の方が男子にくらべて自殺率は低く、また配偶關係から考えると、われわれの豫想とは全く反對に、未婚者の自殺は有配偶者の自殺よりはるかに多いことが明らかにされている。またこのうちに配偶者と死別したり離別したりしたもの、自殺率も有配偶者の自殺よりはるかに高いことが證明されている。

また自殺と地域差の問題は都市に多く、農村では少いと考えられており、事實西歐社會ではほとんど例外なく都市の自殺率は農村のそれより高いことが明らかにされている。しかるに我が國では都市の自殺率は西歐諸國にまさるとも劣らない程の高い自殺率を示しているが、それにもまして特異な點は農村の自殺率が少くとも戰前では常に都市の自殺率より高かつたと云うことであり、戰後都市の自殺率より低くなつたがそれも戰後農村の自殺率が減少したのでなく、都市の自殺率が急激に增大して農村の自殺率を追い越したと云う意味であり、戰後も農村の自殺率は引きつづ

き增加の傾向にあると云う事實であり、これは後に述べる日本の特殊な社會環境によるものと考えられる。

また社會狀勢が自殺に及ぼす影響について最初に何人もおもいつくことは景氣の變動である。不況期には失業の增加收入の減少によつて經營不安が廣がり、生活の焦慮が加わるに從つて自殺が增加する。これに反して好況時には失業の減少、收入の增加によつて生活水準が高まり自殺が減少する。しかしこの場合自殺の經濟的原因は大部分貧困によると考えられやすいが、貧苦は勿論その大きな原因ではあるが、餓死寸前の極貧による自殺は案外少く、むしろ收入の減少による生活水準の低下に對する不滿や、隣人や近親者に對する劣等感などの精神的、感情的要素による場合が少くないので貧苦は常に相對的な貧苦であると云うことができる。

またつぎに、最も大きな社會狀勢としての社會變動、ことに革命や戰爭の場合について考えると、その規模が大なれば大なるほどまたその時期が長ければ長い程、國民の日常生活はあらゆる物質の缺乏と統制により苦しくなるのは當然であり、國民の日常生活が困難になると不況期と同樣自殺は增加すると考えられるに拘らず事實は全く反對に自殺は極めて少い。このことは我が國のみならず諸外國においても等しく見られる現象であり、統計はこの事實を明らかに示している。

また、資本主義の異常な高度化はリースマンのいわゆる孤獨な群集 (the lonely crowd) としての社會的性格をつよめ、そこでは市民に漠然とした不安感があり孤獨に對する恐怖が發生して、往々にして人々を自殺においやる。

第二の自殺の動機は上述の自殺への潛在的條件である。即ち自殺傾向に直接的原因が加わつて自殺の實行へ人々を引きづつてゆく明確な自殺の直接的心理的原因である。これには精神錯亂、家庭不和、病苦、貧困、事業の失敗、淫逸放蕩、犯罪や失敗に對する自責や慚愧、私通、姙娠、失戀、厭世や失業など種々あげられるが、とくに日本における家庭不和による自殺は家族關係の複雜さ、その重壓からくる自殺で、それ故に晩婚女性に多い。

第三の自殺の倫理とは自殺者がみずから死をえらぶものに、多かれすくなかれ何らかの意味で正當化して自殺することに十分な理由があると論理的に追究して、自分自身は勿論周圍の人々をも納得させようとするいわゆる内側からの必然性である論理と心理がともなう。ことに純粋自殺、哲學自殺と云われる論理にもとづいたときには、死を美化しあこがれるロマンチックな自殺のための自殺の如きは攻撃性よりも逃避性が強い。

しかしいづれにしても自殺の心理には消極的なものと積極的なものとの二つが働いているのが常である。まづ消極的なものとしては、これは心のエネルギーの低下したことのあらわれであり、つぎのごとき特色がある。第一には何か強い欲求不滿に際しておこるもので無力感、劣等感、不安などに抑壓されて希望にみちた自負卽ち自己擴大する意欲を喪失しており、第二にはそのために人間としての發展の停止、いわば人格の萎縮した狀態になり、この結果萬事に積極性がなくなり、受身の生活がつづくと自己自身にのみ興味や關心が向けられいわゆる自己愛の心理狀態に陷る。

しかしかかる消極的受動的な條件のみで自殺におもむくことは稀であり、自殺にふみきるためには通常多少とも積極的な心理が働かなければならない。これにまた攻撃的なものと逃避的なものとの二つの基本的なものがある。一般に自殺の攻撃性はつらあてや抗議としての意味はあるが、元來それが向けられるべき對象に向かず自己自身に反對した攻撃性であり、いわゆる「内向した攻撃性」である。また逃避的な場合では欲求が空想の形をとり死をあこがれ、美化するにいたる。ことに空想や夢への逃避は青年の自殺者に多く、現實ではみたされない欲求を空想や夢幻のうちにみたそうとする感傷的な自殺卽ちさきにのべた哲學自殺とか純粋自殺などにはかかる心理的性格がつよい。

最後に第四の自殺の實行は、卽ち自殺の手段である。この自殺手段の好みは國によつて異つている。とくにその國の文化の高低や生活環境によつてことなる。例えば、日本とフランスの場合を考えても入水や縊死は共通であるが、前者には毒物自殺が多いのに對して、後者では銃器によるものが多い。また自殺手段は必然的に時代や場所によつて

もことなる。例えば、毒物が發達しそれが容易に入手出來る時代とそれ以前の時代ではその手段はことなるし、またガス施設のない農村や地方とガスが常用されている都市ではガスによる自殺の差の比較は不適當である。

また自殺手段の好みは男女や年齢によつてもことなる。例えば、男女とも苦痛の比較的少い毒物による自殺は多いが、入水自殺は男子に少く女子に多い。また轢死のごとき無慘な自殺手段は若年層に多く、高齢者に少く、同樣に縊死と入水は年齢の高まるにつれて多く用いられている。

第三章　日本の自殺現象とその社會的基盤

最近日本の自殺率はこれまで最高を示していたスイスやドイツをしのいで世界で第一位を占めている。通常自殺率は文化の低い未開社會では低く、文化がすすむにつれて高くなるといわれている。この意味では日本の文化は世界最高水準にあると云えるが、日本の文化は低くはないが世界最高であるかは疑問である。

また一方自殺率は道德水準を測定する標準になると云われているが、この意味では日本の道德水準は最も低い地位にあるといわれるであろう。日本の道義は或意味では戰後著しく頽廢したことは事實であるが、しかし日本の道德水準は世界最低に轉落したとは考えられない。それ故自殺率の高低のみで文化や道德の水準を測定しようとする試みは不十分である。

從つてわれわれは自殺率を左右する原因を他に求めようとするならば、まづかくのごとく日本人の自殺率が世界最高を示す原因を日本人の人種的民族的宿命のなかに大きな自殺傾向が潛在的に存在するのではないか。卽ち日本人の血管には自殺を好む血が流れているのではないかと云う疑問である。若し人種的に自殺傾向が強いとすれば數十萬にのぼる海外移住者が他國においても同樣の高い自殺率を示すべきであるに拘らず結果はその反對で、むしろ他の民族

とははるかに低い自殺率をしめしている。この事實はデュルケムによるドイツの自殺傾向の研究によつても明らかであり、彼によればドイツ人の自殺傾向の強いことが國内のみならず、國外のドイツ人にも同様認められるならばドイツ人の人種的特質に歸することが出來るが、ドイツ人の國外居住者は必ずしも高い自殺率を示していないとのべている。このことはとりもなおさずドイツ人も日本人もその自殺率の高いことはそれぞれの國内における文化的社會的環境においてのみ見られる事實であり、決して人種的特質によるものでないと考えることが出來る。しかもこの事實を證する一つの大きな根據は後述するごとく、とくに日本において女子の自殺傾向の強いことと、更に最も悲慘な親子心中の多いことである。

まづ日本の自殺率の高い一つの原因は、女子の自殺の多いことである。最近の統計によると、男の自殺率では日本の男子は世界第一でなく、スイス、オーストリヤ、デンマークについで世界第四位であるに反して女子の自殺率は各國にくらべて著しく高い。普通男の自殺一〇〇につき女の自殺は二〇—三〇であるのに、日本では六〇以上であり、男女の自殺の開きは極めて小さい。この理由として種々のものが考えられるであろうが、まづ西歐諸國では女子は男子にくらべて經濟的困難に出會う機會の少いことや社會保障の完備、その他女子の不幸な境遇に順應する力の強い事などあげられるが、しかし如何なる理由をあげてもあらゆる點で我が國よりも文化的、經濟的、道德的水準の低いインド以外の他の後進國においても同様女の自殺が男子のそれより低いと云う事實は、結局我が國の社會的環境の特異性によるものといわなければならない。

このことはさらに我が國にのみ多く見られる親子心中についても同様である。この動機としては貧困や家庭不和、夫婦離別などがあるが、これらの原因も他民族に比して著しく強いとは考えられないのに拘らず、我が國にのみ著しく見られる現象であるとするならば、同様我が國の獨特な社會關係卽ち血緣關係を中心とした家族制度と云う封建

遺制的拘束が強く作用しているものと考えなければならない。

この意味において本章では日本の社會と文化を概觀して、それが我が國の自殺現象に如何なる影響を及ぼしているかを見るであろう。いうまでもなく日本社會は經濟的構成からみて資本主義社會であり、全體構造からは近代社會であると云うこともできるし、また人間の結合關係からは市民社會である。しかしあらゆる面からみて日本社會は果して眞の近代社會と云うことが出來るであろうか。いなむしろ封建的なものが濃厚に殘つている非近代社會である。

その最も大きな理由は我が國の社會はその善惡はともかく、家族主義的社會であるということである。卽ち個人が家族から獨立せず、家族員個々人よりも重視される家が社會を構成する單位となつていること、同時にまたかかる家族的結合が家族外部のあらゆる社會にまで擴大されていると云うことである。いわば家族的身分と主從的身分の合體であり封建的家族主義とでも云うことが出來る。

このことは日本の家族を具體的に分析することによつて直ちに明らかになるであろう。卽ち日本の家族は家父長的家族であり、ここでは直系的に祖先から子孫へと繼承されてゆく家が成員個人よりも重視されるが、またその家のなかにも明確な序列がある。しかもこの序列の上にある家長には家產を背景にして自ら權威が生じ、家族員はこの權威に服從する。ことに長男子優先の家督相續の行われる場合、男女の差は明らかであり、入嫁する女子の地位は家族の職業や階層的地位によつてことなるが極めて低い。ことに國民の半數を占める農村家族においては、家族的經營と極めて低い生活水準によつて家の重壓は一層强くなり、個人は家族主義的結合に强く規制される。同樣に家族經營を主とする中小商工業の場合にも、職業と家庭生活との未分化の故に家族の重みは大きい。その他我が國のあらゆる社會にこの封建的家族主義の風潮が浸透しており、そのため戰後の民法改正にもかかる桎梏を打破するにはいたつていない。

かくのごとく家族主義的に形成される人間にとつて家族外の社會は一般に荒波のたつ浮世と考えられ、自由に獨立しがたい人々にとつては家族のみが彼等の生活を保證し、安息を與えてくれる場であり、家族外の社會は無秩序な不安な社會と見られている。從つて彼等はこの家族外の社會においても家族的な結合をもちこみ庇護を與えてくれる人に對して一種の家長的な權威を認める。人々は親分と子分と云う同時に主從的でもある結合をもつて社會を作りあげる。卽ち封建的家族主義が社會の構造をいろどるのである。

かくしていわゆる「顔」の權威によつて結びつくのであり、かかる社會關係は强弱濃淡はあるが我が國のあらゆる社會や集團にかかる結合原理が浸透しつつあると云うことができる。そしてかくのごとき家族主義的に構成されるとその社會の統制は傳統的慣習によつて、また親分的恣意にもとづいて行われるのが一般である。しかもその傳統はもはや現實の生活に卽しない過去の名殘りであるか、または非合理的な復古的感情であるにすぎない。またその集團の成員はこの非合理的な慣習の權威を背負う支配者に恭順し、それぞれの身分的序列に從つて場所柄をわきまえた行動をとる。從つてそれは內面的な反省を經たものではないが、また支配者のいわゆるカリスマ的乃至傳統的權威に不本意ながら從うのでなく、從順な下僕として頭を下げるのである。彼等には自由を振舞う餘地は全く與えられていないが、また自由を拘束されたとも考えていない。

かくのごとく主體的な自覺がない場合、彼等の道德は他人が何と云おうとも正しいことは行うと云う內面的道德とはならず、他人に非難されるから、また嘲笑されるからと云う外面道德となる。從つて彼等の行動を規制するのは恩であり、義理であり、恥であつて、罪の意識は生れてこない。生活の基準は常に自分の外にある。內面的な欲求を抑制することが修養であり、與えられた身分的行動樣式に全力をあげて從こうとが人のまことと考えられている。

文化もここではヒューマニズムにもとづいた正常な罪惡感的文化は生れず、恥辱感文化があるにすぎない。とにか

く、かくのごとく前近代的性格のつよい社會の中核となり、その根源となつている日本の封建的家族主義は、戰後も依然として夫婦關係は男に親子關係は親に過重の權威と負擔をになわせている。

從つてこのきづなが切斷されたり、また意識的にとの抑壓に反抗するならば、人々は内外において強い抵抗にあわねばならない。上述の我が國における青少年の自殺の激增と女子の自殺率の高さはこのあらわれであると云えるであろう。

第四章　自殺と宗教

前章においてわれわれは社會環境の自殺に及ぼす影響を概觀したが、ここでは社會環境のうちでも極めて重要な意義をもつ宗教の自殺現象に及ぼす側面を考察する。

人間は死に對する恐怖を太古は云うまでもなく、人類發生の當初においてすでにもつていたことは疑いない。從つて死をともなう自殺は原始社會や未開社會では明らかに恐怖の目をもつてみられていたことは容易に想像される。

それでは人類の文化が或程度進化した古代社會では自殺は如何に受取られていたであろうか。われわれは他の古代文化國家のこれについての文獻を得ることが出來ないために、便宜上ギリシヤ、ローマの古代社會を例にするならば、まづ有名なピタゴラス(Pythagoras, B.C. 582-493.)は自殺を次の理由で否定している。卽ち人生は神が人間に課する修行の道であり、この道から勝手にのがれさろうとする自殺行動は神のおきてに背く仕業であり、人間は神の意志による自然死をまたなければならないとしているが、この考えを受ついだソクラテス(Sokrates B.C. 470-399.)は同樣の考えから自殺を排擊した。彼によると人間は神の家畜である故に自殺は神の所有物をそこなう仕業である。そのうえソクラテスは人間は神に仕える兵卒であり、自殺は隊をはなれて逃亡するに等しい行動であるとして自殺を神學的

立場から否定している。

そのために宗教的立場からする自殺防止とその對策がギリシャ都市國家によつて取上げられた。まづ自殺者への罰としてその手を切りとることが行われ、また有名な哲學者プラトン（platon B.C. 427-347.）は自殺者をアテネ周邊の淋しいところに碑もなく、名もしるさず埋葬すべきことを主張し、テーベやスパルタでも同樣自殺者には埋葬は許されず、ミレトスで婦人の自殺が流行したときその死體をして市中を引廻すべき法令を出したといわれている。

古代から中世に入ると、ヨーロッパでは自殺は最もつよくキリスト的色彩をもつて取扱はれるようになつて來た。例えば、多くの教會史家によつて傳えられているキリスト教徒の殉難は、最後は信者が生涯において犯した罪を清めると考えられ、當人にとつては最も大きな名譽と考えられ、しかもその遺族は教會から財政的保護をうけた。しかしその後殉死の名において、遺族の生活を保障せんとするものが續出したために宗教的自殺は殉死とみとめないと宣言した。

しかしまた、中世ヨーロッパに特に著しいしかも教會史上に多くの問題を提出したものに、いわゆる貞操自殺がある。例えば、ローマの代官ソフロニア（Sophronia）の妻は皇帝マクセンティウス（Maxentius）に犯されんとして自殺し、また四一〇年ローマがゴート人の將軍アラリック（Alaric）によつて占領されたとき、女子は貞操を守るために大量に集團的に自殺を企てたので、ついに教會もこの種の自殺を教理上如何に取扱うべきかに困惑した。

大體教會はキリスト教が確立された初期には自殺については何等の關心を示さなかつた故に、聖書のなかにおいても自殺を正面から非難した文句は見出されないのみならず、初代キリスト教父テルトリアヌス（Tertullianus 160-222.）は殉死や自殺を讃美し、キリストさえ十字架上でみずから教のために殉じたとしている。

しかし四世紀に入ると、教會は自殺者に對して非常に否定的態度をとるようになり、ことに自殺反對の立場を鮮明

にしたのは新プラトン派である。この派によると、自殺は神の創造物である人間をほしいままに殺すことであり、その故に最も大きな罪である。ユダもキリストを裏切つたばかりでなく、自殺したことによつてその罪は許すべからざるほど重大であるとしている。

しかし中世において反自殺論を確立したものは外ならぬアウグスティヌス（Augustinus 354-430.）である。彼は有名な「神の國」（De Civitate Dei）において、自殺を厭うべき呪われた惡として強く否定している。この彼の自殺反對論はその後ながく教會の自殺否定論の強い支柱となつた。

このアウグスティヌスについで中世神學史において自殺論を更に展開したものはトーマス・アクイナス（Thomas Aquinas, 225-1274）である。彼も主著「神學論」（Summa Theologica）において、自殺を心理的社會的道德的見地から強く非難している。さらにダンテ（Dante 1265-1321.）も神曲（Divina commedia）において文學的表現を用いて自殺罪惡感を主張している。

これらの人々の宗教的自殺觀がそののちの教會の指導者や世俗的支配者に強く影響し、狂人や惡魔にとりつかれた精神異常者以外は自殺者の葬儀は勿論墓地への埋葬をも禁じられるようになり、ことに犯罪者の自殺には財產、土地の沒收と云う重罪をもつてのぞんだ。これらの慣習がイギリスでは一三世紀フランスでは一四世紀後に正式に成文化されるようになつた。

しかし一五世紀から一六世紀にかけてヨーロッパ大陸は宗教改革とルネッサンスを經驗し、社會的動搖のなかに立たされ、それにともなつて、自殺そのものもまた自殺觀も大きく變貌した。その第一は激增する自殺に對しての宗教による禁止はくづれ、ことに新教の人間觀から他人の自由と自主性が前面におしだされ、自殺は他人的行動として認められるようになり、またそれに伴つて神の權威が失墜するとともに、これまで人間のよりどころであつた精神的支

柱が一時的にせよ奪われることによつて、自殺が急激にふえた。

しかも新教のなかでもカルヴィニズムのごとく峻烈な罪の觀念を強調する場合、神によつて選ばれざるものと斷定された人々が深い絶望感に陷り、自殺をとげることが少くなかつた。例えば、カルヴィニズムの強いスイスにおいて自殺率の著しく高い事實はこのことを明かに物語つている。

さらに中世を經て近代に入るとますます宗教の權威がうすらぐとともに、自由主義の擡頭につづく資本主義の勃興は次第に自殺行爲をむしろ讃美し、ことに詩人や文學者、哲學者のなかには自殺を人間に殘された最後の唯一の自由として謳歌せんとの風潮が強くなつて來た。ゲーテ(Goethe, 1749-1832.)のごときは「若きヴェルテルの惱み」のなかで青年の自殺を大膽に讃美し、そのため當時の青年のあいだに自殺が大流行したと云われている。また哲學者ショウペンハウエル(Schopenhauer 1785-1860.)も自殺を讃美こそしないが、教會的法制的自殺禁止に反擊して罪惡でないことを強調している。しかし西歐の宗教、ことにカトリックでは現代においても自殺を罪惡視し、そのため舊教の支配のつよい國家や民族においては自殺率が著しく低い事は注目すべき現象であるとして學者のつとに指摘するところである。

さて最後に、我が國における自殺と宗教の問題に立入るべきであるが、我が國では宗教と自殺に關する學問的資料や文獻も極めて乏しく、同時にこれについての研究も極めて少い。このことは歐米ほど日本では宗教が社會生活に浸透していないために自殺を宗教の種類によつて分類し、信教別によつて自殺統計の表をつくることが不可能であつたとも考えられる。

しかし調査統計によつても日本人は家の宗教を問われた場合、八〇%までは佛教と答えている。たとえこれが單なる傳統と慣習による「家の佛教」であるとしても、有形無形に佛教的影響をうけていると考えてさしつかえないであ

ろう。しかも日本での佛教の受取られかたは單にその教義の消極的方面にのみ注目せられ、ひいてはそれが惡い意味でのニヒリズムに通じている。ことに四法印や「欣求淨土、厭離穢土」と云う宗教觀は日本人の世界觀または人生觀を規制し、さらに生命觀や自殺觀に或程度の影響を及ぼしていないと斷言出來ないであろう。

しかし現代の日本人は自我に目覺めるとともに個性や生命の尊重を自覺しつつあると云えるが、それでもいまなお外國人の目から見て奇異に感ぜられるほど、些細な理由から生命輕視の自殺を決行する傾向が少くない。事實昭和三十一年度の自殺原因に關する統計表によれば、「厭世自殺」が總數の二五%を占めている事實は、日本人がいかに現世に對する執着が乏しいかの一端をしめしている。

むすび

本論は表題とかけはなれた點が少くないが、これも限られた紙數と資料の不足と實證的調査研究の時間的餘裕をもたない筆者としては止むもえないことであつた。しかしいづれにしても自殺の問題は現代社會における重要な社會問題と化しつつあり、しかも既述のごとく我が國では青少年の自殺が少くない。その大部分が社會にとつて有爲の若者であり、その意味では社會の損失と云わなければならない。

日本の主たる宗教をもつて任じている佛教は現代社會において、最早役にたたない宗教と化したであろうか、われわれは否と答えなければならない。佛教は現代は勿論明日に生くる宗教であると斷言して憚らない要素をもつている。しかし現實には極めて消極的現實逃避的厭世的宗教として受取られているとすれば、これは明らかに佛教者の怠慢である。

願わくばこの拙論が佛教者の自覺を促して、佛教教義が現代に生かされ、有爲な若人のみならず老少年の風に散る

がごとき生命の救濟に役立つならば筆者の幸これにすぐるものはない。

（一九五八、一二、八　釋尊成道會）

【參考書】

1 園原太郎「自殺の心理」一九五二、創藝社
2 南　博「生きる不安の分析」一九五二、光文社
3 岡崎文規「自殺の國」一九五八、東洋經濟新報社
4 井村恒郎「現代病」一九五二、光文社
5 岸本英夫・増谷文雄編「人間と宗教」（人間の科學V）、一九五五、中山書房
6 安部能成・務台理作・天野貞祐・和辻哲郎「新倫理講座」一九五二、創文社
7 E. Durkheim, fe sincide ; étude de sociologie 1897.（飛江謙一・鈴木宗忠譯「自殺論」一九三二、寶文館）
8 宮城音彌編「人間の心理（人間の科學）」一九五五、中山書房
9 「現代宗教講座V」一九五五、創文社
10 磯村英一「社会病理學」一九五七、有斐閣
11 川島武宜「日本社會の家族的構成」一九四八、學生書房
12 〃　「イデオロギーとしての家族制度」一九五七、岩波書房
13 福武　直「日本農村の社會的性格」一九四九、東京大學出版部
14 〃　裁「日本の社会」一九五八、毎日新聞社
15 中村　元「東洋人の思惟方法」一九五七、みすゞ書房